

北京日本学研究中心

通

讯

《第十四号》

责任编辑：山下纪久枝 谁燕 邮政编码：100081 Tel:8422277--584 1991.10.15

简 讯

- 9月13日下午2点半，北京外国语学院王福祥院长（客座教授）在“中心”一层阶梯教室进行了公开讲座。讲座题目为‘如何写论文’。主要以一年级研究生为对象，简明扼要，风趣诙谐地讲解了卡片的制作方法、资料的收集方法等。
- 9月13日下午6点，“中心”日方在颐和园内的听鹏馆餐厅举行了答谢宴会兼新专家欢迎会。先欣赏了颐和园傍晚的美景后，又尽情品尝了宫廷菜的美味。
- 9月20日下午5点，“中心”在北京外国语学院留学生食堂举行了「中秋晚会」。二年级研究生徐滔和孙建军主持了晚会。二年级研究生徐蕾演唱的「康定情歌」、助教班文钟莲演唱的「津轻海峡冬景色」，可与专业水平媲美。而且，本学期日方专家中多才多艺者颇多，使晚会高潮迭起，气氛非常活跃，直到晚上8点半大家才尽兴而归。
- 为期3天的第四次硕士学位论文答辩于9月25日结束。22名申请者全部通过答辩。预定10月份把答辩通过者的论文提交国务院学位审查委员会，1992年2月左右授予学位。
- 第五次硕士学位论文答辩的论文提交截止日期为10月31日。从这次开始，要求所有的论文（B5版）都用打字机打印出来后，方可提交。

（关于论文答辩的） 《感想》 野坂幸弘

阅读四篇论文，的确感到有些辛苦。常因文中不确切的语言表现而停顿，对此，不想多费笔墨（当然，我并非认为这些是琐碎小事）。最令人感兴趣的同时也是最难把握的，是论文作者如何理解和感受论文中所涉及的作家及作品的心声（这由来自于人类认识和感性领域，是理解的基础）部分。我深感使用文理完全迥异的异国语言，且在学位论文这一规定性文章中渗透作者本人的见解，或对作品予以某种理解，的确并非易事。然而，在致力于近现代文学研究时，不但要认识到其困难性，更要认识到其必要性。在答辩会上，有时所答并非所问，给人以不协调之感。特别是当提问涉及研究前提等基本问题时，更为突出。造成这一结果，是出于上述同样的理由。（宋国忠译）

公 开 讲 座

- △第1次 9月12日(星期四) 「日本的近代化和森鸥外」 矶贝英夫先生
- △第2次 9月19日(星期四) 「近代化和女子教育」 大滨彻也先生
- △第3次 9月26日(星期四) 「词语的意思及教学方法」 永保澄雄先生
- △第4次 10月10日(星期四) 「关于『源氏物语』的称呼变换
=变成「蟋蟀」的公主=」 小池清治先生

介 绍

☆刘德有先生(客座教授。中华日本学会会长)

生于1931年7月2日。现任中华人民共和国文化部副部长。专攻方向为日本文化。主要著作有：『日本滞在15年』『日语趣谈』等。

☆翟东娜(客座研究员。“中心”第二期毕业生,现为北京师范大学讲师。)

1955年生于北京。参加过第4期大平班的学习。专攻日本语言。
1987年9月至1988年2月在大阪女子大学进修。

☆刘晓方(客座研究员。“中心”第1期毕业生。现为中央财政金融学院讲师。)

1964年生于江苏省。1985年考入北京日本学研究中心,研究方向为日本中古中世文学。现从事《古今和歌集》的研究。

※ 专 家 活 动 ※

「国庆节」厦门·泉州旅行日记

9月30日(星期一)阴。到达厦门已是晚上,风刮得很猛。

10月1日(星期二)时雨时晴。上午,参观了鲁迅纪念馆、南普陀寺等。乘坐的旅游车在一站一站向前移动。车内,厦门美丽的导游小姐用日语热情地介绍着车窗外的情景:右边是「イカシオ」工厂,左边是「イカシオ」市场。「墨鱼干」工厂?刚一转念,后才明白说的是「一处」工厂,「一处」市场。导游小姐又问,昨天晚饭吃的海里的ヘビ(蛇)好吃吗?此话一出,车内顿时呈现出恐慌状态。数分钟后,弄清楚说的是海里的エビ(虾),悬着的一颗心才放了下来。下午,从鼓浪屿的郑成功纪念馆向一工艺美术商店行进的途中,突然,大家发现有两位先生没跟上队伍。水?粮食?难道他们去了隔世的孤岛?…(其中一部分属虚构)。转回到码头一看,他们早已等在那儿了。

2日(星期三)阵雨。上午,参观崇武。下午,游览泉州。看了回教圣人墓、开元寺等后,还想看看伊斯兰寺院时,因时间已晚,只好踏上归途。

3日(星期四)天气终于放晴。上午参观了集美。乘坐中午的飞机回到北京。

台风雨中仍然风平浪静的厦门湾。晴朗的天气里进入机场的回归的飞机。这是一次印象深刻的旅行。

(篠崎信夫)



ニュース

- ☆9月13日午後2時半、センター1階階段教室において、王福祥院長（客員教授）による公開講座が開かれた。題名は「如何写論文」。主に大学院1年生を対象としたもので、カードの作成法、資料の読み方等を、分かりやすく、ユーモアいっぱい話された。
- ☆9月13日午後6時から、センター日本側の主催で、頤和園内の聴鶴館餐厅において答礼宴兼新しい先生方の歓迎会が開かれた。夕暮れの頤和園を散策したあと、宮廷料理を存分に楽しんだ。
- ☆9月20日午後5時から、北京外国語学院・留学生食堂において、「中秋晚会」が開かれた。大学院2年の徐滔さん、孫建軍君の司会により、8時半近くまで、楽しい時間を過ごした。大学院2年の徐蕾さんの「康定情歌」、研修コースの文鐘蓮さんの「津軽海峡冬景色」はプロ並みだった。また、今期の日本側の先生方にも芸達者な先生が多く、座を大いに盛り上がらせた。
- ☆3日間にわたる第4回学位審査・口述試問（答弁）は9月25日に終わり、学位審査申請者22名は全員合格した。10月中に、国务院学位審査委員会に論文が提出され、1992年2月ごろに学位が授与される予定である。
- ☆第5回学位審査・論文提出締切日は、10月31日である。なお、今回から論文はすべてワープロを用いて提出することが、義務づけられた。（用紙のサイズはB5版）

口述試問（答弁）の感想

野坂幸弘

四篇の論文を読むのはとても辛苦でした。表現のおかしなところに躓いて先にすすめなかったことは措いておきますが（些細な問題だと考えているわけではありません）、いけば興味があって、そして読み取りにくかったのは、対象の作家あるいは作品を、ほんとうは、どう理解し、なにを感じているのかという筆者の肉声（人間認識および感性的な領域に主に由来する理解の基盤）の部分です。

コンテキストの異なるコトバをとおして、しかも学位論文という制度的な文章に個々の<私>の発想を封じ込める、あるいはそれがあるものとして読み取ることの難しさを改めて感じましたが、近代・現代文学の研究を志す場合、その必要性は困難さとともにもっと自覚されていなければならないと思います。

答弁の席上、問いと答えの双方が無関係に見えるほどのちぐはぐさは、問いが基本的で研究の前提に関わるものであるときに特に目立ちましたが、それも同じ理由によるはずで
す。（岩手大学教育学部教授、日本近・現代文学）

公開講座

- ♡第1回 9月12日(木) 「日本の近代化と森鷗外」 磯貝英夫先生
♡第2回 9月19日(木) 「近代化と女子教育」 大濱徹也先生
♡第3回 9月26日(木) 「語の意味とその教え方」 永保澄雄先生
♡第4回 10月10日(木) 「『源氏物語』の呼称変換について
= 「蟋蟀」になった姫君=」 小池清治先生

紹介

♡劉徳有(客員教授。中華日本学会会長。中華人民共和国文化部副部長)

1931年7月2日生まれ。専攻は日本文化。主な著書は、「日本滞在15年」、「日語趣談」など。

♡翟東娜(客員研究員。センター第2期卒。現在、北京師範大学講師)

1955年生。「大平学校」第4期。1986年、センターに入り、日本語学を専攻。1987年9月から1988年2月まで大阪女子大学で研修。

♡劉曉方(客員研究員。センター第1期卒。現在、中央財政金融学院講師)

1964年江蘇省に生まれる。専攻は、日本中古中世文学。現在は「古今和歌集」についての研究をしている。

「国慶節」 厦門・泉州旅行記(專家活動)

9月30日(月)曇り。夜着いた厦門は風が強かった。10月1日(火)雨、時々晴れ。午前、魯迅記念館、南普陀寺ほか。バスでの移動中、厦門美人のガイド・尤さんに、右手に「イカシオ」の工場、左手に「イカシオ」の市場が見えると言われ、イカの塩辛?と思ったら「一か所」のことだった。さらに、昨日の夕食のウミのヘビはおいしかったですか、の一言に車内は一時恐慌状態に。数分後、海の海老とわかり一安心。午後、鼓浪嶼で鄭成功記念館から土産物屋に移動中、一部の先生が消息を絶つも、約30分後、譙燕さんの「2人足りない……」のひとことで全員はじめて気付く。不安の中での搜索(と観光)。食糧は?水は?よもや、このまま絶海の孤島で……、メンバーの不安はつのも(一部フィクション)。お二人はさらに1時間後、宇野、大濱両先生によって、船着き場で元気な姿で見えられた。「いやー、気付いたらはぐれてて」とのコメントあり。

同2日(水)雨、断続的。午前、崇武。午後、泉州。回教聖人墓、開元寺等を見た後、さあ観光の目玉・イスラム寺院へ、と思ったら、運転手さんの「用事があるから厦門に帰る」の一言で帰路に。同3日(木)やっと晴れ。午前、集美へ。昼の飛行機で北京に。

台風の影響による雨の中でなお穏やかだった厦門湾。快晴の中、エアポケットに入った帰りの飛行機。印象に残る旅でした。(篠崎信夫)